



巴波川に架かる中村橋より生駒、大川島ごしに小袋を望む。下初田。2024/06/26

田園環境都市おやまビジョンづくりに向けた
小山市11地区の風土性調査
報告レポート「基礎資料・概要版」

中地区の風土性調査について

「風土」とは、地域の自然に対して人間が暮らしと生業を通して働きかけることでかたちづくられる、人々が生きる環境のこと^{*1}を言います。人々が生きる環境、それは私たちの身近な世界、生活世界のこと^{*2}でもあります。

地域の風土(生活世界)を、あらためて把握するために、

- ①地理学や民俗学的な視点で地域を見て歩く「踏査」(現地調査)
- ②アンケートや聞き取りを行う簡易社会調査
- ③小山市史や研究論文などにあたる文献調査

これらを組み合わせた風土性調査を実施しています。

中地区は令和6年5月から令和6年7月の期間に調査を行いました。

この概要版は、その調査成果の報告書「中地区 基礎資料」から主なトピックを抜粋し、一部に加筆を加えたものです。報告書の完全版(A4版94ページ)やアンケート集計結果報告書(同・39ページ)は、最後に紹介するリンクから閲覧ができます。

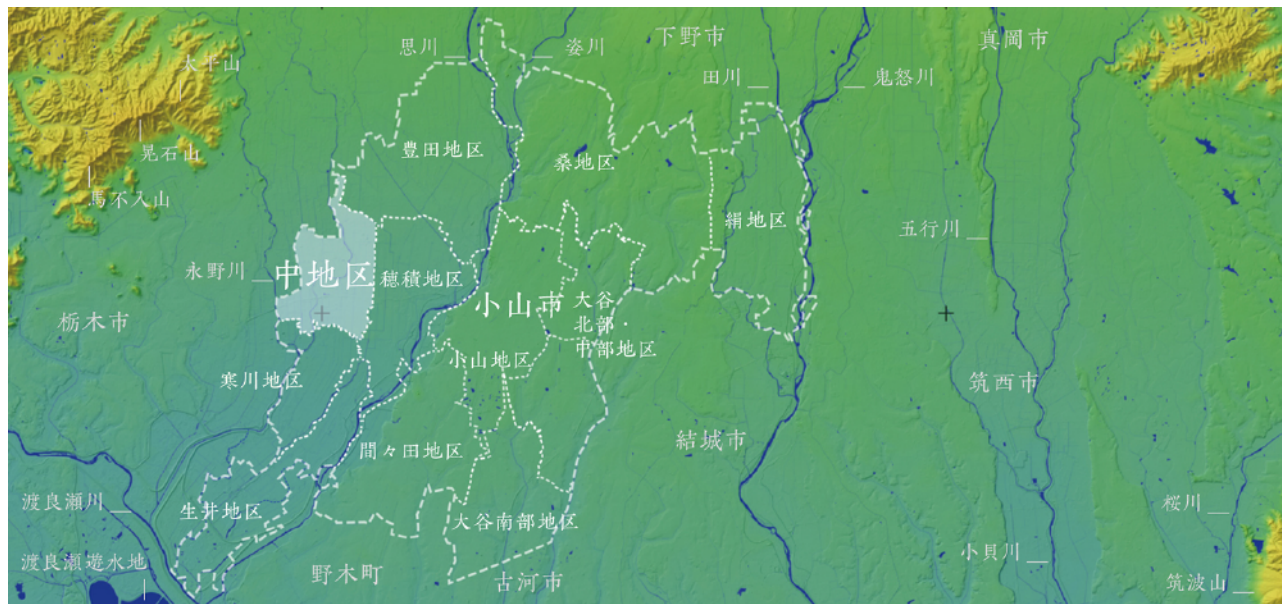
*註1：出典 藺田稔編『神道』（弘文堂、1988年）

*註2：出典 アルフレッド・シュッツ、トーマス・ルクマン『生活世界の構造』（筑摩書房、2015年）

1 | 中地区の概況

小山市の基本地形と中地区の位置

西から思川低地、宝木(たからぎ)台地、鬼怒川低地が並び、宝木台地の東を鬼怒川、西を思川が流れています。中地区は小山市の西部に位置し、思川低地上に立地しています。



出展 | 国土地理院 地理院地図 <http://maps.gis.go.jp/> (廣瀬改変2024年)

小山市西部に形成された穀倉地帯。地区の中央を思川が弧を描いて流れ、背景に晃石山や太平山が控える。

中地区は、明治22年(1889)に南小林・上泉・下泉・下河原田・大川島・生駒・下初田・井岡・小袋の9村が合併した中村をもととします。地区の面積8.73km²は市の面積の約5%、人口1,977人は市の人口の約1.2%を占めます(令和6年4月1日現在。「小山市統計年報 令和6年度版」より)。当地区では、井岡遺跡から縄文時代後期後半と晩期の土器が出土しています。時代は進んで下泉古墳群が築かれ、奈良・平安時代には今日の小山市域の北側に東山道が通されて思川西部に下野国府が置かれ、その南側に条里制が施され、穀倉地帯が形成されます。近世には、日光山裏街道の梅の宮宿が置かれ、佐野道の生駒宿、巴波川の本沢河岸と合わせて人と物の移動を支えました。巴波川は、東西に大きく弧を描いて地区の中央を流れ、南北にのびる日光山裏街道、東西にのびる佐野道と交差します。これらに沿って微高地の上に家々が建ち並び、低平地の水田の広がりこれが囲み、約8km西側に晃石山や太平山が望める景観の基本形が、今日まで保たれています。

2 | 水陸交通の要衝

巴波川は、近世初頭から年貢米や領主荷物の輸送路とされ、17世紀半ばを過ぎると全国的に商業活動が盛んになるのに伴い栃木町が発展し、通船量が増えました。また、地区を南北に抜ける日光山裏街道と東西に抜ける脇往還「佐野道」が旧小林村、現在の南小林的で交わり、梅の宮宿が置かれました。



東箭神社の前から見た梅の宮宿。南小林。2024/06/22

街道が南北に、脇往還が東西に抜け、
二つの宿場と河岸を擁した
水陸交通の要衝、近辺の小市場。

慶長10年(1605)に榎本藩を立藩した本多忠純は、城下町の整備に際して、慶長13年(1608)に小林村の集落を現在の南小林的の位置へ移しました。ここは、日光街道の野木宿から下生井、新波を経て栃木へ抜ける日光山裏街道と水戸、小山方面から佐野、足利、上州方面へ抜ける佐野道の交差点に当たり、梅の宮宿が置かれて延享元年(1744)から稼働します。同宿は、野木宿と例幣使街道の栃木宿の中間に当たることから、にぎわいました。また、梅の宮宿から東へ500mほど離れた地点には、佐野道の生駒宿が設けられました。近世の中地区は、これら2宿と巴波川水運の本沢河岸を擁して、水陸交通の要衝となりました。そのため、近辺の小市場としての役割も果たし、酒造屋2軒、醤油屋1軒、宿屋3軒をはじめとして、農業の他にもさまざまな商業・営業・職人がみられたことが記録に残っています。地区の隆盛は、南小林的の東箭神社、上泉の熊野神社、大川島神社に、宮大工から独立した彫物師磯辺の系統による精巧な装飾彫刻が残ることからも窺えます。

3 | 蛍にまつわる歴史

近世の中地区では蛍が多く発生し、古河藩に「蛍御用」を課されていました。村々で、蛍の成虫を採取して藩役所へ輸送するもので、武蔵一宮氷川神社（現さいたま市）では江戸時代に徳川家、明治時代に宮中へ蛍を献上していました。古河藩でも、将軍に献上するのに江戸へ送ったことがあります。蛍は観賞用の他、薬用に供されました。蛍の採取と輸送は、蛍の生態の観察に基づいて方法を工夫しながら行われていました。



蛍橋、青木家住宅。下河原田ー上泉。2024/06/24



麦わらを編んで作られた蛍籠。中公民館。下河原田。2024/04/18

地域の古文書をもとにこれらのことを明らかにした研究（後述）によれば、蛍の種類はゲンジボタルであったと考えられるそうです。『小山市史民俗編』には、昭和の初年以降、上泉が蛍で知られるようになり、昭和2年（1927）に本沢橋をコンクリート橋に架け替えた際、「蛍橋」の名に改めたと書かれています。昭和中期になると環境が大きく変わり、蛍は見られなくなりました。平成13年（2001）からは、中小学校で稲作活動、水辺ビオトープ活動が始まり、地域住民らでつくる「はたる飛び交う中地区を目指す運動の会」が協力して、巴波川の蛍の生息環境の保全活動が行われています。内容は、子供たちによる蛍の生態や生息環境に関する調べ学習や蛍の飼育、河川清掃などです。



写真は、上泉の八坂神社脇の水路で撮影した淡水巻貝カワニナです。ゲンジボタルの幼虫は、カワニナを食べます。国土交通省と環境省が市民と行う全国水生生物調査で、カワニナ類はゲンジボタルと共に「水質階級II（ややきれいな水）」の指標生物8種類に含まれます。仮に、水質に問題がなければ、水辺に湿った苔類が生えていて産卵できるか、幼虫がもぐって蛹になれる土手があるかなどが、蛍復活の残る課題となります。

4 | 中地区での暮らしと意識

前半で概況を紹介したような地形や都市の形成の歴史の上に、人々はどんな意識でどのような暮らしを営んでいるのでしょうか。中自治会のご協力で6月から7月にかけて自治会回覧などを通してアンケートを配布し、紙での回答、インターネット上での回答あわせて415名から回答をいただきました。また、自治会リーダーの方々、農業者の方々、子育て世代の方々を対象にグループインタビューを実施し20名にご協力をいただきました。その成果から一部を抜粋し、この章では住民の方々の声も交えながら紹介します。

4-1 アンケート調査からの報告

アンケートの設問【1】【2】の集計結果をもとに、中地区で暮らす人々の①出身地、移り住んだ経緯や理由、②生活圏、③地域資源への認知度・関心度についてまとめました。

①回答者の出身地



自治会の回覧を通してのアンケートでは、地元出身の方のご回答が多くなりますが、中地区でも回答者の6割を少し超える方が中地区で生まれた方でした。地区外から移り住んだ方の理由は、記載されたコメントによると、①実家や親との関係で ②結婚を機に ③仕事の関係で・・という理由が上位を占めています。

②生活圏

以下の3種類の行動で出かける地域を訪ねた質問の回答、上位3地域を示します。休みの日についての問いは2つ選択可としました。この結果からは、中地区では、普段の生活においても休日の行動においても、栃木市を生活圏としている人が多いことがわかります。グループインタビューでは、車で10分程度の距離にある栃木市大平地区の商業施設を利用しているという声が多く聞かれました。

日常的 買い物・・・	1 栃木市	198名
	2 小山地区(駅西)	85名
	3 小山地区(駅東)	53名
休日の特別な 買い物や食事など	1 栃木市	165名
	2 小山地区(駅東)	155名
	3 小山地区(駅西)	126名
休日の自然の中 などでの余暇	1 栃木市	122名
	2 栃木県内*	79名
	3 中地区	62名

*栃木県内:選択肢に挙げている栃木市と野木町以外の市町

③地域資源への認知度・関心度

歴史的資源、農業の2項目に対する認知度は、他の田園部と同様に、市街化が進む地区よりも高い傾向にあります。自然環境においては「周囲に緑が多い」のが当たり前という土地柄もあり若干低めになっています。

1 地区の歴史や史跡、寺社、祭りなどを……

知っている				知らない				関心がある				関心がない			
42%				54%				46%				49%			
よく	まあ	あまり	全く	よく	まあ	あまり	全く	とても	まあ	あまり	全く	とても	まあ	あまり	全く
4%	38%	46%	8%	4%	38%	46%	8%	4%	42%	42%	7%	4%	42%	42%	7%

2 公園、街路樹、平地林などまちなかに残る自然を……

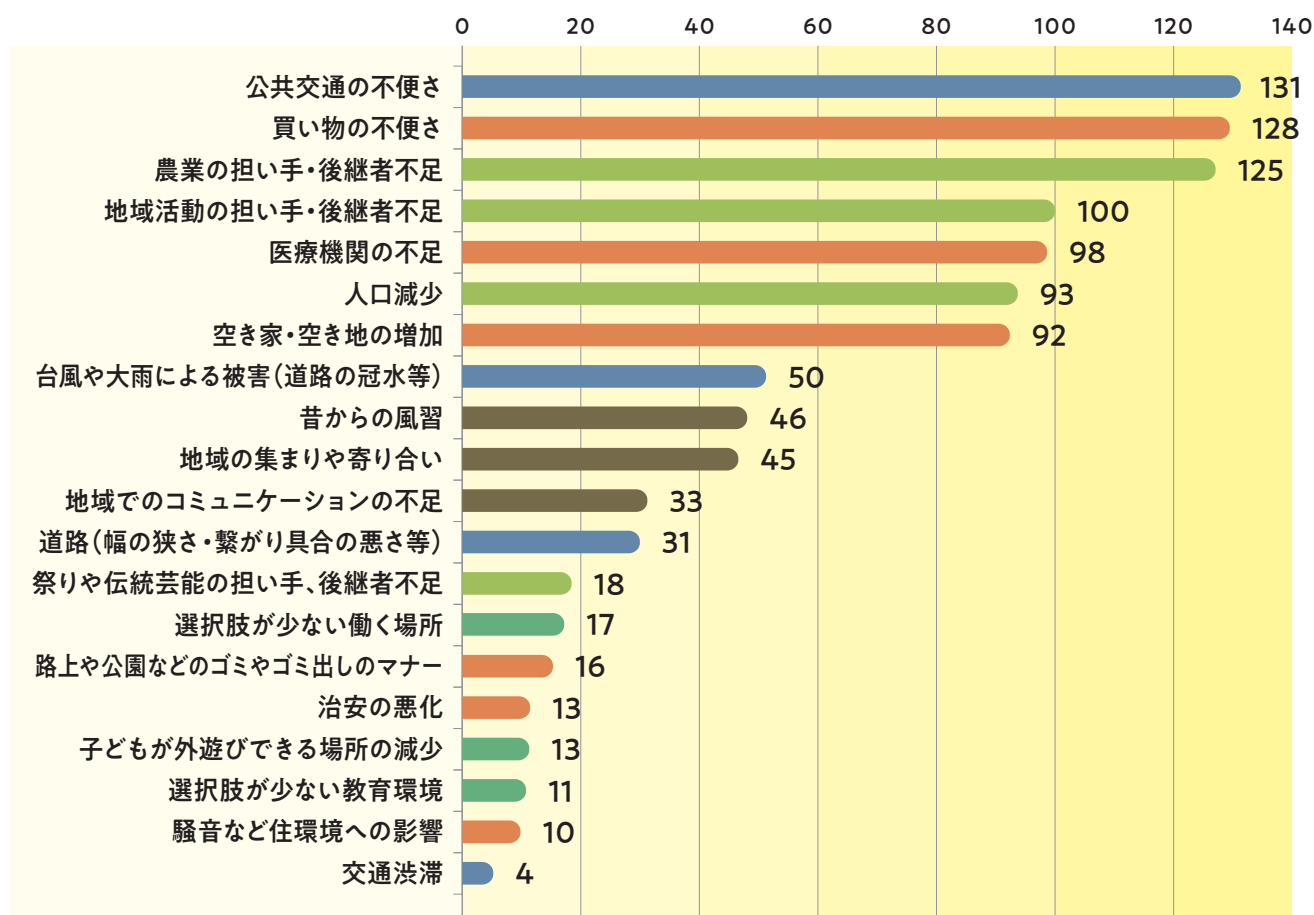
知っている				知らない				関心がある				関心がない			
38%				59%				54%				41%			
よく	まあ	あまり	全く	よく	まあ	あまり	全く	とても	まあ	あまり	全く	とても	まあ	あまり	全く
5%	33%	51%	8%	5%	33%	51%	8%	6%	48%	37%	4%	6%	48%	37%	4%

3 地区で行われている農業について……

知っている				知らない				関心がある				関心がない			
57%				39%				50%				46%			
よく	まあ	あまり	全く	よく	まあ	あまり	全く	とても	まあ	あまり	全く	とても	まあ	あまり	全く
13%	44%	32%	7%	13%	44%	32%	7%	11%	39%	40%	6%	11%	39%	40%	6%

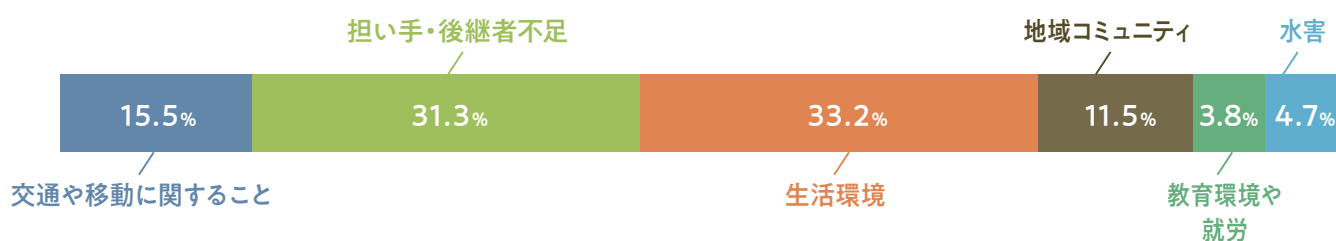
4-2 無くしたい、解消したい、中地区の困りごと

アンケートの設問【4】で「無くしたい、解消したい、解決したい困りごとは、何でしょうか?」と問い、聞き取りをもとに用意した選択肢から3つを選んでもらいました



数字は回答者数。その他7名、無記入40名。

その他と無記入を除いた選択肢を、6つの領域に分けて全体に占める割合を出してみると……。



生活の利便性の向上を願う

買い物の不便さや医療機関の不足などの「生活環境の利便性の低さ」、農業や地域の互助活動での「担い手の不足」について、それぞれ3割を超える人が解消したい困りごとであると考えています。年齢別では(風土性調査「基礎資料」と「アンケート集計結果報告書」に掲載)、60代以上では、すべての選択肢の中で「農業の担い手・後継者の不足」を、最も深刻な困りごととして挙げている人が最多となっています。次に自由記述に寄せられたコメントを紹介します。

中地区の成り立ち：風土性調査報告「中地区 基礎資料」(II踏査及び文献調査による報告)より。

中地区は、
明治22年(1889)に
南小林・上泉・
下泉・下河原田・
大川島・生駒・
下初田・井岡・
小袋の9村が
合併した中村を
もととします。

出典：小山市史編さん委員会編『小山市史
通史編 III 近現代』小山市、1987年、
332頁
国土地理院 | 地理院地図
<http://maps.gsi.go.jp/> (廣瀬改変 2024)



中地区の解消したい困りごとについて、アンケートの設問【4】に寄せられた自由記述から抜粋して紹介します。

この地区に住んでいたら
運転できなくなった時に
自信がない

アンケート【4】自由記述より

生活環境の利便性の低さ

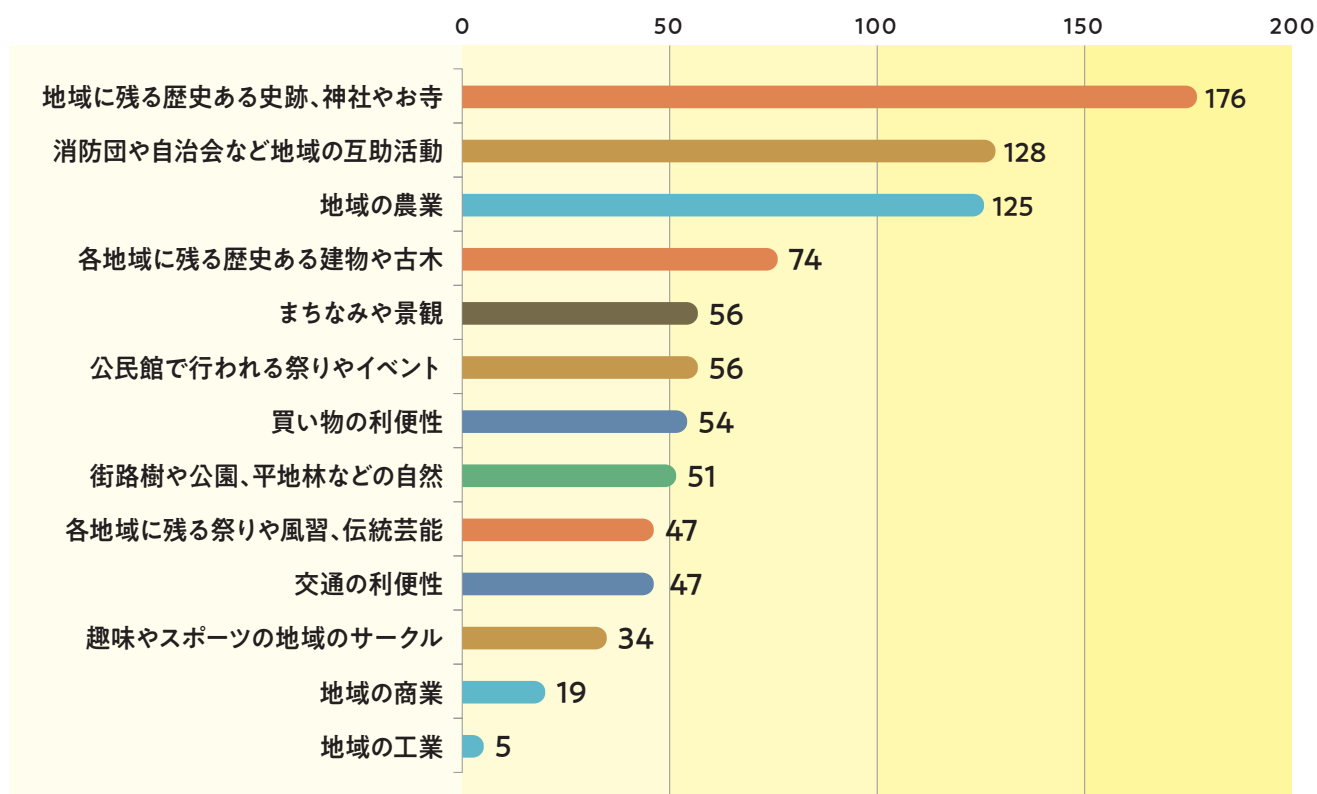
- おーバスがあっても本数が少なすぎ、老人なので近くの歩いていけるところにスーパーがあったらうれしい
- 通学の時間帯に小山駅へ向かうバスがもう少し欲しいです。子どもの進学を考える時に悩みます
- 病院が近くにないので困る。買い物もすべて車で移動なので不便
- 近くにコンビニ、スーパーがほしい
- 飲食店の配達エリアから除外されていることが不便に感じる

農業・地域活動の担い手・後継者不足

- 農業従事者ではありませんが、農業の後継ぎは他地区に行ってしまう田畑は今後どうなるのか心配です
- 現在数名の人達で農地を維持管理しているが70歳を超えている。数年後には中断することになると思われ、耕作放棄地となる。後継者は全く見えない
- 少子高齢化により特に自治会の活動が出来なくなりつつあり、今後が不安です。空き家の増加により治安、火災が不安です
- 地域住民の高齢化により地域の役員が重荷になります
- コロナにより地域の集まりや寄合いが少なくなり、地域の祭り事が無くなってしまい地域のコミュニケーションが少なくなった
- 若者がどんどん減ってきて他へ行ってしまう。若い人たちが働くところもない。新しい住宅も建たない
- 人口減少に伴う各種の急速な対応が必要です
- 未来を見据えた行政サイドの積極的な関わりが必要である

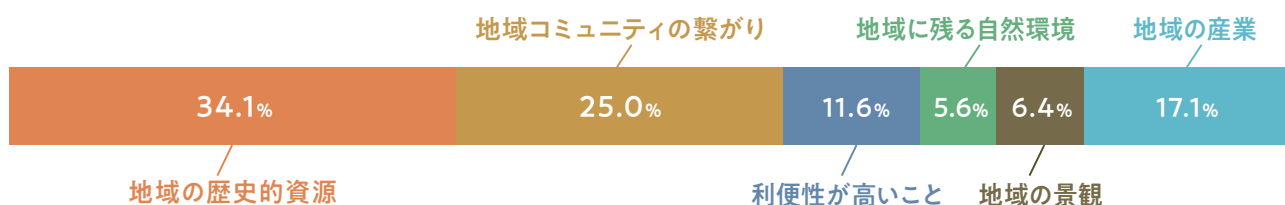
4-3 大切に守っていききたい、中地区の小さな自慢

アンケートの設問【5】で「大切に守っていききたい「小さな自慢」は何でしょうか?」と問い、聞き取りをもとに用意した選択肢から3つを選んでもらいました。



数字は回答者数。その他9名、無記入88名。

その他と無記入を除いた選択肢を、6つの領域に分けて全体に占める割合を出してみると……



この設問の結果から、中地区の皆さんは、特に「先代が残してくれた地域の寺社、地域の農業、そして、地域の互助活動」を大切に守っていきたいと考えていることが見えてきます。アンケート集計報告書に記載した、年代別の結果では、全ての年代を通して「歴史的な史跡や寺社」がほぼ1位(40代では「地域の農業」に次いで2位)に挙げられています。母数が少ない20代30代を除くと、「地域の互助活動」は、年代が高くなるにつれ、上位に入る傾向が見られています。

中地区にある神社の装飾彫刻の例：風土性調査報告「中地区 基礎資料」(II踏査及び文献調査による報告)より。



東箭神社彫刻。南小林。2024/06/26



熊野神社彫刻。上泉。2024/06/24

南小林的東箭神社、上泉の熊野神社である」。
東箭神社の「本殿の価値を高めているのは、
後藤正秀の手による豊富な装飾彫刻である」。
「正秀と同じ磯辺一族のもう1つの作品が残るのが
上泉の熊野神社」「分家3代目である磯辺敬信の」

出典：田・島の宮宿。本沢河岸周辺の歴史的遺産を活用した地域活性化事業実行委員会編・発行「田・島の宮宿。本沢河岸周辺の歴史的遺産に係る報告書」2017年、7-8頁

中地区の大切に守りたいことについて、アンケートの設問【5】に寄せられた自由記述から抜粋して紹介します。

人口が減っているの
各地区的結びつきを強くすることが
大切だと思う

——アンケート【5】自由記述より

自然環境と中地区の風景

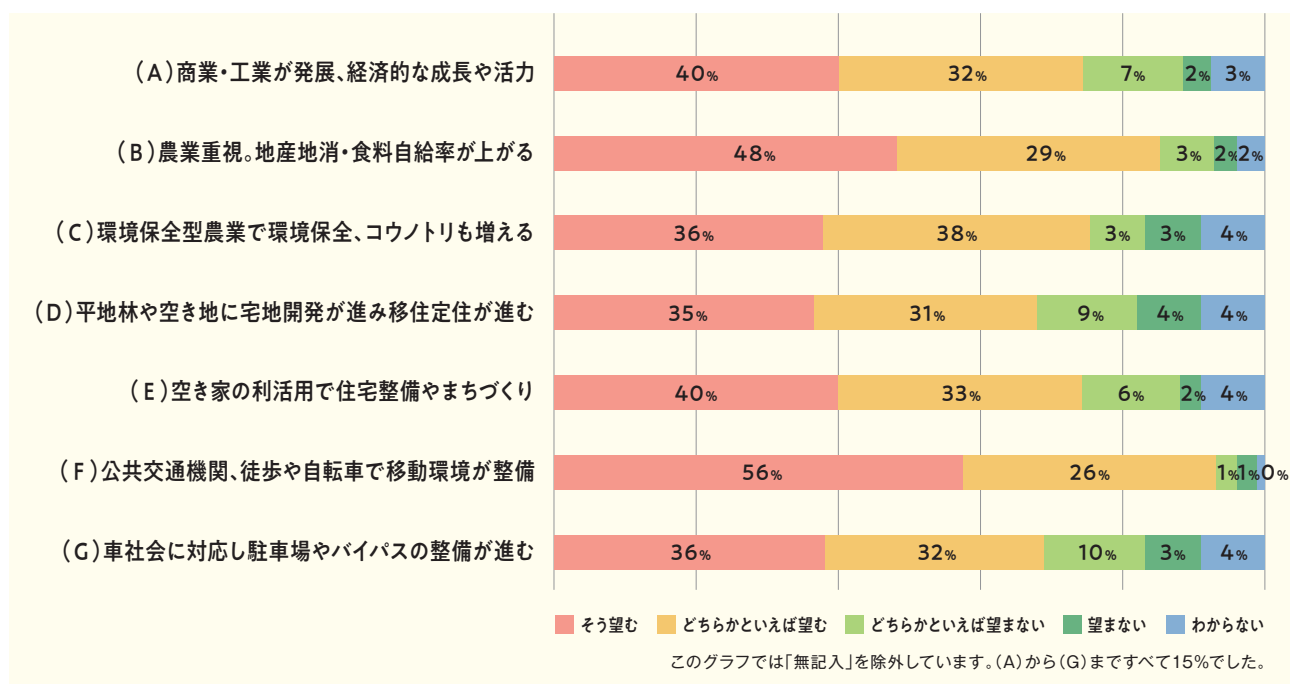
- 特に田植えの後の田園風景（夜の月がきれいです）
- 農村地域を残して欲しい。静かで環境に良い
- 中地区には巴波川が流れているので、川の河岸公園の整備をしてもらいたいです
- 近くに日陰があり散策等できる整備された広大な自然公園がほしい
- 上下水道未整備だが、おいしい地下水が有るこの水を守り続けたい
- 自然豊かなところ。水やお米がおいしい。純朴な人柄
- お米がおいしい
- 風景が楽しいです。自転車の貸し出しもあると良い。イベントやワークショップ、フリーマーケットを身近な形で開催して、まわりからも気軽に遊びに来れるような地区づくりを。ブース出店の無料化など、優しく新しい企画があると、まわりからも、目に心にとまると思います

地域コミュニティのつながり

- 集落の人口が減ると神社やお寺の存続ができなくなります
- 各地区で行う祭りや風習を守り、人のつながりを強く保つ
- 世帯も少ないため地域の助け合いは必要だと思う
- 場所的に静かなところに住んでいるが、地域の人たちとあまり会わない
- 人口減少により、地域の「おすそ分け」「助け合い」等、地域の支え合いが失われていく
- スポーツや地域のサークル活動を公民館が中心になって実施する
- 助け合いの活動が大切

5 | 田園環境と都市環境の調和がとれたまちづくりへ(1)

次に、アンケート集計結果より、「20年後、30年後の小山市の望ましい都市環境のあり方について」尋ねた【7】の結果を紹介します。例示した小山市の将来像7項目について、それぞれ「そう望む・どちらかと言えば望む・どちらかと言えば望まない・望まない・わからない」から選んでいただきました。中地区の皆さんからの、未来の小山市への視点です。



7項目の全文は、以下の通り。(A) 商業・工業が発展し、工業団地も増え経済的な成長や活力が重んじられている小山市 (B) 地域の農業が大切にされ、地産地消が進み、市域内の食料自給率が上がっている小山市 (C) 環境保全型の農業によって自然環境も良好に保たれ、コウノトリも増えている小山市 (D) 空き地や平地林などに新しい宅地開発が進み、定住する若い世代や移住者が増える小山市 (E) 空き家の改修や利活用が進み、あるものを大切にした住宅整備やまちづくりが進む小山市 (F) 公共交通機関の整備や、徒歩や自転車で安全・快適に移動できるまちづくりが進む小山市 (G) 車社会に対応して、駐車場やバイパスの整備など、車での移動が快適になる小山市

田園地帯での共通性と中地区の特性

7つの項目を支持・共感者が多い順(「そう望む」「どちらかと言えば望む」の割合の合計が高い順)に並べると、中地区の結果は以下になります

- 1 82% (56) (F) 公共交通機関の整備や、徒歩や自転車で安全・快適に移動できるまちづくりが進む
- 2 77% (48) (B) 地域の農業が大切にされ、地産地消が進み、市域内の食料自給率が上がっている
- 3 73% (40) (E) 空き家の改修や利活用が進み、あるものを大切にした住宅整備やまちづくりが進む
- 4 72% (40) (A) 商業・工業が発展し、工業団地も増え経済的な成長や活力が重んじられている
- 5 74% (36) (C) 環境保全型の農業によって自然環境も良好に保たれ、コウノトリも増えている
- 6 68% (36) (G) 車社会に対応して、駐車場やバイパスの整備など、車での移動が快適になる
- 7 66% (35) (D) 空き地や平地林などに新しい宅地開発が進み、定住する若い世代や移住者が増える

都市部でも田園部でも上位3項目に「公共交通機関の整備」「農業重視」「空き家の利活用」の順で並ぶ傾向が見られます。中地区では、住宅を供給する方法としては、(D)「空き地や平地林などに新しい宅地開発」という考えより、(E)「空き家の改修や利活用」を支持する人が7%ほど上回っています。

7 | グループインタビューより：中地区の課題と未来への展望

中地区の風土性調査では、自治会長の方々、子育て世代の方々、農業従事者の方々の合計20名に、座談会形式のグループインタビューで聞き取り調査にご協力をいただきました。そこで語られた内容から、一部を抜粋して紹介します。

人口減少に伴う不安や課題

●この5年で空き家が増え始め、集落ごとにある共同墓地も管理する人がなくなる心配がある。空き家も墓地も民生委員などの協力で、**早い段階から情報を集め早めの対策**が必要だ
●一年を通していろんなお祭りが農村の楽しみだったが参加する人も担う人も減り、複数の祭りを**秋祭り1本に統合**するところもある
●今後、**古い神社の修復の問題**も出てくる。公民館の修復は補助が出るが神社は出ない。世帯が減ると維持管理も厳しくなる。古木の伐採も費用がかかる。神社も潰す可能性もあるが、罰当たりを感じるし、その責任は負えないし、難しい問題だ

子どもを取り巻く環境

●他の市町や地区では学校と隣接の学童が多く、間々田や大谷は学童がしっかりして人気がある。中地区にも親が働きながら安心して通わせられる学童が必要
●水曜日の一斉下校の時は約束して公民館などに集まって遊んでいる
●**少人数の小学校の良さ**として、先生の目が行き届いていることや昼休みなど縦割りで他学年とも遊ぶことがあると思う
●クラス替えがなく人間関係に揉まれる経験もないことや、中学校の部活も激減して、**あらゆる選択肢が少ない**ことが心配
●祭りなどは自分たちが子どもの頃に比べると減ったが、民間の飲食店が会場になる夏祭りは子どもたちも楽しんでいて、交流の良い機会になっている

中地区の農業

●祖父母の時代は農機具がなく隣近所で田植えも稲刈りも**助けあって共同**でやっていた。子どもの頃に手伝っていた記憶がある
●敷地に余裕があり牛馬を買っていた家が多く、牛糞で堆肥を作り利用していた
●米は気候変動で夏の高温が続く受粉がうまくいなくなってきている
●イチゴは平成から令和に変わる時に大嘗祭で中地区のものを献上した。小山も(栃木も)農産物はいいものがたくさんあるがPRが下手ではないか。閉鎖的・保守的な面を変えていく必要があると思う
●農業に対する国策がコロコロ変わり、農家は翻弄される。米価は上がらないのに
●田園環境都市というときに、地区内の環境や景観を守ろうという一方で**農家が減り耕地が荒れていく**。この状況を「現実問題として」どうしていくのが課題だ
●都市部との関係でいえば、親戚や祖父母が農家だと言う人が減り、農業との関わりがない人、農業のことを知らない人が増えている。交流や理解してもらう機会が必要だ
●集落の経営体が離農する人の農地を引き受けているが、経営体のメンバー自体が高齢化していて、持続性が無い

コミュニティ

●農業・地域の互助活動(自治会・だけボラ・消防団など)担い手不足が深刻だ。地区外に勤めていると時間がないが、農業者や自営業者の負担も大きくなっている
●今後は、親の代から引き継いできたことを、**自分たちが楽しみながら次の世代に引き継いでいくことが大切だ**と考えている
●人が減っているので自治会ごとには難しいが、**中地区全体でコミュニケーションも取れるような祭りのような場を作れるといい**
●小学校や公民館など、**中地区独自の「集まれる拠点」**は大切にしていきたい

